

「(時間数詞) ぶりにV」構文に関する一考察 —「初めて」との共起関係を中心に—

兪 暁 明

0. はじめに

現代日本語における接尾辞「ぶり」の意味用法について、多くの国語辞書ではこれを二大別して取扱っている。つまり、「体言・動詞の連用形+ぶり」の形で、「…の様子・状態・やり方などを表す」場合と、「時間を表す語+ぶり」の形で、「時日の経過の程度を表す」場合である。本稿は、後者の「時間を表す語+ぶり」を考察の対象にし、もっと具体的に言えば、「時間を表す数詞（以下、時間数詞と略す）+ぶりに+V」という構文に焦点をあて、「～ぶりに」とその後続動詞との構文上のつながりや意味解釈、成立条件を明らかにした上で、「初めて」との共起関係について検討していきたい。⁽¹⁾

1. 問題の提起

まず、次の例を見てみよう。

(1)着工後、十年ぶりに完成した。(文化庁『言葉に関する問答集6』(1980:71))

(2)中国男子サッカーチームが44年ぶりに初めてサッカー 2002年ワールド・カップの入場券を獲得しました。(『日語知識』2002-6、p39)

「(時間数詞) ぶり」の基本的な意味は、「再び同じ状態が現われる」、または「再び元の状況に回復する」、と一般的に解釈される。これに基づいて考えれば、例(1)も(2)も、その文としての的確性・妥当性が問題視されることになる。なぜならば、「十年ぶりに」と「完成した」、「44年ぶりに」と「初めて」、のような共起は意味的に矛盾している関係にあると思われるからである（言うまでもなく、(2)の文中の「入場券」を「出場権」に直すべきである）。「このような使い方は、標準的とは認められない」（文化庁1980:71）と言われるのもこのためであろう。

では、例(1)や(2)のような用法の文についてどう考えるべきか、もっと深く検討する必要があるだろう。そのために、まず実際の用例調査を通して、それぞれの使用実態を把握しておかなければならない。

2. 用例調査

2-1. 調査の対象・方法

今回は、三つの新聞記事データベース（朝日新聞、読売新聞と北海道新聞）を利用して、用例調査を行った。具体的には、それぞれの検索語に「ぶりに完成」と「ぶりに初めて」を入れ替えて用例を調べてみた。調査範囲はいずれも、「2004年6月30日まで」、とした。

2-2. 調査結果

例(1)(2)と全く同じ文構造の用例を多数検出した。表1はその結果のまとめである。⁽²⁾

表1

検 索 語	用 例 数 (総件数)			
	朝日新聞	読売新聞	北海道新聞	合 計
ぶりに完成	59	28	15	102
ぶりに初めて	52	48	25	125

では、それぞれの用例を挙げてみよう。

- (3)…国道104号四車線化が、工事着工以来、十年ぶりに完成した。(朝日1997 / 3 / 13)
- (4)…農道（二車線）が、着工から十三年ぶりに完成し、二十三日開通した。(読売2003 / 7 / 24)
- (5)札幌と帯広を結ぶ国道274号の未開通区間…が十九日、事業着手以来二十五年ぶりに完成、全線開通するが、…。(北海道1991 / 9 / 5)
- (6)…。平岡さんは十年ほど前から、仲間の消息をたどり始めた。そして今年六月、四十四年ぶりに初めて同期会ができた。(朝日1994 / 8 / 5)
- (7)一行は成田空港行きの飛行機に乗り換え、同日夜、北朝鮮への帰還事業が始まってから三十八年ぶりに初めて故国の土を踏む。(読売1997 / 11 / 8)
- (8)三月の最初の逮捕以来、約七カ月半ぶりに初めて供述調書の作成にも同意し、署名したという。(北海道2002 / 10 / 25)

このように、この二つの用法はかなり一般的になってきているということが、上述した内容から言えよう。ところで、このような言語現象に対して、日本語の母語話者はどう見ているのだろうか。これを詳しく考察するため、アンケートで調べることにした。

3. 日本語母語話者に対するアンケート

具体的には、上に挙げた例(1)(2)(6)(7)を含む七つの例文（三つの書き換えた例を含む）をもとにしてアンケート用紙を作成し、日本語母語話者15名（ともに大学現職の日本語教師・研

究者)を対象にして調査を行った。実施期間は2004年6月28日～8月13日。具体的な方法として、メールによるやり取りまたは直接依頼の形で、個別的にアンケート用紙の送付と回収をした。被験者全員から回答を得たが、2名の答えははっきりした内容のものではないので、対象から外すことにした。その結果は表2のとおりである。⁽³⁾

表2

番号	例 文	回 答 者												
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1	着工後、十年ぶりに完成した。(引用例)	×	×	△	△	×	×	×	?	△	×	○	×	×
2	彼は10数年ぶりに初めて国に帰った。	×	×	△	○	×	×	×	×	×	?	○	×	×
3	遭難者は18時間ぶりに初めて救出された。	×	×	△	○	×	×	×	×	△	×	×	×	△
4	彼は40年ぶりに初めて免許を取った。	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
5	平岡さんは十年ほど前から、仲間の消息をたどり始めた。そして今年六月、四十四年ぶりに初めて同期会ができた。(朝日)	?	×	○	○	△	×	×	×	○	×	×	×	○
6	中国男子サッカーチームが44年ぶりに初めてサッカー2002年ワールド・カップの入場券を獲得しました。(日語知識より)	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×
7	一行は成田空港行きの飛行機に乗り換え、同日夜、北朝鮮への帰還事業が始まってから三十八年ぶりに初めて故国の土を踏む。(読売)	×	×	○	○	○	×	○	?	○	?	○	×	○

上の表から、まず、4番の例文を除いて、回答者の答えにはかなりの食い違いがあることが分かった。次に、ともに実例ではあるが、7番・5番・1番(=例(3))に対する許容度(“○”をつけた人数)が減っていくという傾向が見られる。

4. 「(時間数詞) ぶりにV」構文の検討

4-1. 「(時間数詞) ぶりに」と後続動詞

「(時間数詞) ぶりにV」構文の検討にあたって、まず「(時間数詞) ぶりに」の後続動詞にどんなものが現れてくるのか、を具体的に見る必要があるだろう。日本語の動詞をアスペクトの観点から分類したものと、金田一(1950)、奥田(1977)、工藤(1995)などがよく挙げられるが、ここでは、説明の便宜上、金田一(1950)の分類に基づいて考えていく。⁽⁴⁾端的に言えば、氏の分類に従ってまとめた結果、「(時間数詞) ぶりに」の後には、第一種の「状態動詞」と「第四種の動詞」が現れにくいということが言える。では、ほかの二種、つまり「継続動詞」と「瞬間動詞」の場合はどうであろうか。

調査の有効性と効率のよさから考えて、2-1に示した同様な方法で再び調査を行った(但

し、時間の制限があったので、調査の対象を朝日新聞にしぼって、そして検索語を「年ぶりにV」（Vには、Vの運用形とVタ、の両方が含まれる）、と限定した。なお、調査範囲は調査を行った2004年7月2日までであった。その結果、「(時間数詞) ぶりに」の後続動詞には概ね次のようなものが現れてくることが分かる（括弧内の数字は総件数）。

○継続動詞：行く (43)、建てる (36)、書く (22)、作る (20)、読む (18)、走る (14)、歌う (7)、乗る (3)、降る (3)、吹く (2)、着る (2)、泳ぐ (1)、戻る (1)、怒る (1)、など

○瞬間動詞：生まれる (77)、見つかる (73)、始まる (33)、終わる (12)、消える (8)、届く (6)、見送る (5)、決まる (4)、知る (3)、分かる (3)、到着する (3)、着任する (3)、着工する (2)、起こる (2)、触る (1)、遭遇する (1)、目撃する (1)、など

このほか、瞬間動詞のものとして、「完成する、救出する、結成する、発見する、獲得する、帰国する」などが挙げられる。

4-2. 「(時間数詞) ぶりに」の意味解釈

次に、「(時間数詞) ぶりにV」構文における「ぶりに」の意味解釈について考えてみよう。先行文献を参考にして、今回集めた用例を具体的に見てみると、「ぶりに」の意味用法を、下記のように、二種三類に分けることができる。

①従来の基本的な意味：

a. 「再び同じ状態が現われる」（同一状態の反復）

(9)三日ぶりにふろに入った。(グループ・ジャマシイ1998)

(10)一か月ぶりに休暇が取れた。(森田1989)

(11)大手スーパーのダイエーは、首都圏で4年ぶりに降った大雪で高騰している野菜を10日
に限って店頭価格より3、5割安い値段で売る。(朝日1990/2/9)

(12)郵便局員の長男として生まれた。祖父も父も養子だった大廻家では、120年ぶりに生まれた待望の男子。大事に育てられ、怒られた記憶がないという。(朝日2002/1/9)

(13)隊長自身は、プラスバンド部でトランペットを吹いていた。「25年ぶりに触ったけど、音が出なくて。みんな、昔のカンを取り戻すのに四苦八苦」。…(朝日1988/5/15)

b. 「再び元の状態に戻る」（「初期状態」（定延1997）への回復）

(14)遭難者は18時間ぶりに救出された。(グループ・ジャマシイ1998)

(15)一週間ぶりに意識を回復した。(森田1989)

(16)…彫刻から絵画や詩作、出版物に至るバラエティー豊かな作品が網羅され、約70年ぶりに
見つかり初めて展示されるという木彫品「栄標」など、貴重な作品が展示されている。
(朝日2003/11/17)

②新たな派生的な意味：

c. 「ある事が実現するまでにそれだけの時間の経過が必要である」(「状態の転換・生起」)

(1)着工後、十年ぶりに完成した。(再掲＝例(3))

(17)水沢市黒石町にある曹洞宗の名刹・正法寺の第一期保存改修工事が、六年ぶりに終わった。…。(朝日2000／3／5)

(18)…。戦時中に遺髪だけが届けられた兄の亡くなった状況が58年ぶりに分かったことがきっかけだ。(朝日2003／9／25)

(19)…。「義理土産」というのがあの頃もあったと42年ぶりに知った。(朝日2003／8／10)

特に注目すべきは、例(12) (13)のような、後続動詞に瞬間動詞が用いられるものである。つまり、これらの例文における「生まれる」「触る」は瞬間動詞ではあるが、「(時間数詞)ぶりに」に後続して用いられる場合、「同一状態の再現・反復」の意を表すことになるのである。上の考察から、「ぶりに」の意味分類に関して、さらに表3のようにまとめることができるだろう。

表3

「ぶりに」の意味分類		「ぶりに」の後続動詞	「～ぶりにV」の状態性
①	a	継続動詞；瞬間動詞	有——…(反復)——→有
	b	瞬間動詞	有→無——(復旧・回復)——→有
②	c	瞬間動詞	無——(生起)——→有

言うまでもなく、「ぶりに」に見られる二つ(①と②)の異質な意味用法について、既に一部の研究では言及されている(国広1995：64～67)。また、『新明解国語辞典』(第五版、p1243)にもほぼ同様な指摘があり、その上、②にあたる用法を「もと誤用に基づく」と注釈するのが興味深い。

4-3. 「(時間数詞)ぶりに完成」構文(c文)の原理

前にも触れたように、「ぶりに」の①の意味用法と比べて、②のほうが比較的新しいものとされ、そして随分問題視されているが、前節での考察を通して、この種の構文の妥当性を認めるべきであろう。その理由として、次のことが挙げられる。

ア. この構文における「ぶりに」は、特に物理的な時間の長さを強調し、「長い時間が経ってやっと」の含意を持っている。「ぶりに」の前項つまり時間数詞の具体的な内容を見てみると、例文の大半は年数の多いものであって、月単位の用例はわずか数例だけだった。

イ. 「ぶりに」の後続動詞は、「反復性」(＝同一状態の反復)や「再現性」(＝初期状態へ

の回復)の動作を表すものではなく、「一回性」の動作を表す瞬間動詞に限られる。
 ㊦、「～ぶりにV」の表す意味は、「無(ゼロ)」の状態から「有」の状態への生起・転換、
 あるいは事柄の成立、ということである。

5. 「(時間数詞) ぶりに初めてV」の構文について

5-1. 「(時間数詞) ぶりに初めてV」構文のメカニズム

表2によって明らかなおと、「ぶりに」と「初めて」との共起に違和感を持つ人が多い
 ようであるが、それは「ぶりに」の表す意味を「再び同じ状態が現われる」と理解・解釈さ
 れることに大きくかかわっていると言えよう。確かに、「同じことが繰り返される」という
 ことと「初めて」とは意味的に矛盾しているように見えるが、「(時間数詞) ぶりに初めてV」
 という構文における「ぶりに」は、前述したとおり、単なる時間の長さを強調し、つまり「長
 い時間が経ってやっと」という意味に用いられるのであって、「初めて」とは直接かかわっ
 ていないのである。換言すれば、「初めて」の係り先(修飾先)は後続の述語動詞そのもの
 であり、その動作が成立するまでの時間・期間(の長さ)を表すのが「～ぶりに」の役目で
 ある。前に挙げた(6)～(8)の文を例にして言うならば、それぞれ(6')～(8')のように解釈で
 きるだろう。

(6)…。平岡さんは十年ほど前から、仲間の消息をたどり始めた。そして今年六月、四十四
 年ぶりに初めて同期会ができた。(再掲)

(6')仲間と再会する——四十四年ぶり／初めて——同期会ができた

(7)一行は成田空港行きの飛行機に乗り換え、同日夜、北朝鮮への帰還事業が始まってから
 三十八年ぶりに初めて敵国の土を踏む。(再掲)

(7')帰還事業以来帰国する——三十八年ぶり／初めて——敵国の土を踏んだ

(8)三月の最初の逮捕以来、約七カ月半ぶりに初めて供述調書の作成にも同意し、署名した
 という。(再掲)

(8')逮捕以来供述する——七カ月半ぶり／初めて——供述調書作成に同意・署名した
 もっとも、(8)の「ぶりに」は(6)(7)のそれと違って、4-2で述べた「新たな派生的な意味」
 の用法である。そして、下記の例も同様に考えてよからう。

(20)バブル経済の破たんを象徴するイトマン事件で、「主役」を演じた3人が19日、逮捕
 以来ほぼ5カ月ぶりに初めて法廷に顔をそろえた。…(朝日1991/12/19)

(20')逮捕以来3人が一緒になる——5カ月ぶり／初めて——法廷に顔をそろえた

(21)彼の主著が今回、半世紀ぶりに初めてロシア語で2万部も出版されたのには、ソ連で
 の東洋思想や仏教への関心の高まりが反映しているものと見られる。(朝日1989/3/

22)

(21') 今回の出版——半世紀ぶり／初めて——ロシア語で出版された

(22) …。つい先日、タイから姫路にきていたゾウの姫子さんが、何と40年ぶりに初めて鎖を解かれた。(朝日1992 / 4 / 3)

(22') 自由な身に戻る(自由に行動できる)——40年ぶり／初めて——鎖を解かれた

(23) 皇太子妃の雅子さまが十三日昼前、二カ月余りぶりに初めて里帰りした。…。(朝日1993 / 8 / 13)

(23') 結婚式後の里帰り——二カ月余りぶり／初めて——皇太子妃として里帰りした

もし、上の例に対する分析が正しければ、「(時間数詞) ぶりに初めてV」という構文の本質は、文章表現の簡潔性を求めるため、もともと二つの独立した文が一つに短縮された、ということにあると言えよう。小説などの文学作品においてこの類の用例が全く見当たらないのに対して、簡潔性が求められる新聞記事では多くの用例を集めたという結果からも、この点が証明されると言える。

5-2. 「(時間数詞) ぶりに初めてV」構文の分類

4-2で行った意味分類に基づいてまとめると、「(時間数詞) ぶりに初めてV」という構文の例も大きく二つに分けられる。

①「同一状態の回復」または「初期状態への回復」

(24) 昭和二十年夏、長野県から空知管内沼田町に援農にきた学生たちが十六日、四十五年ぶりに初めて同町を訪れ、当時の宿泊、農作業をした家族と対面をした。(北海道1990 / 7 / 17)

(25) 江戸時代に全国を歩いて測量した伊能忠敬の日本地図が、英国に渡ってから百三十七年ぶりに初めて里帰りする。…。(朝日1998 / 3 / 23)

(26) …。自殺したのは、遼寧省瀋陽市在住で、52年ぶりに初めて帰国したという田桂英さん。(朝日1991 / 8 / 25)

(27) 米テキサス州下院は十六日、住民に短銃の携帯を認める法案を圧倒の多数で可決した。州内での銃の携帯は一八七一年に禁止されて以来、百二十四年ぶりに初めて認められたことになる。(朝日1995 / 5 / 17)

(28) (前略) 英国支配下の同地域のカトリック、プロテスタント両勢力のテロ合戦が六〇年代末に本格化して以来、ほぼ三十年ぶりに初めて訪れた平和のチャンスである。…。(読売1998 / 4 / 7)

②「状態の転換・生起」

(29) …、ソ連側の捕虜となった日本人将兵の総数が四百数十人に上っていた事実が、ロシ

ア政府の公式記録文書によって、五十三年ぶりに初めて明らかになった。(読売1992 / 1 / 26)

(30) …、ユーリー・ガガーリンが航空機での訓練飛行中に墜落して、死んだのは1968年3月27日だった。なぞに包まれ、さまざまな憶測を生んだこの最後の飛行の瞬間が23日、共産党機関紙プラウダで19年ぶりに初めて公表された。(朝日1987 / 3 / 24)

(31) ローマ法王、進化論認める(23日) 法王ヨハネ・パウロ2世はダーウィンの進化論を、発表以来137年ぶりに初めて認める書簡を発表した。…。(北海道1996 / 10 / 27)

(32) 「希望通り進学でき、学園生活も毎日が楽しい」と話すのは、浅口郡鴨方町六条院中、岡山県山陽高校(…)土木科一年の中原理恵さん(15)。土木科創設以来、五十七年ぶりに初めて入った女子生徒として話題になっている。(朝日1994 / 5 / 11)

5-3. 「～ぶりに初めてV」と「～ぶりにV」との違い

前章とこの章の前節まで、それぞれ「～ぶりにV」と「～ぶりに初めてV」について検討してみた。ところが、下記の例のように、この二つの表現形式における「V」が同一動詞(または同義動詞)である場合、両者にはどんな違いがあるのだろうか。

(33) a. 10数年ぶりに国に帰った。(グループ・ジャマシイ1998)

b. 10数年ぶりに初めて国に帰った。(作例。例(26)参照)

(34) a. 郵便局員の長男として生まれた。祖父も父も養子だった大廻家では、120年ぶりに生まれた待望の男子。(例(12)再掲)

b. …絶滅寸前だった野生コウノトリの保護、人工繁殖に取り組んで来た同飼育場で、24年ぶりに初めて誕生したひなの公開とあって、…。(朝日1989 / 7 / 31)

まず、(33)のa文とb文を見比べると、前者は「帰国したのは何回目なのかはつきりしない」、つまり、①前回の帰国から10数年経って再び国に帰った(二回目)、と考えられるほか、②出国してから10数年経って初めて帰国した(一回目)、とも解釈できよう。一方、後者のほうは「帰国したのは一回目」、つまり出国してから初めての帰国、としか考えられない。次の(34)においても、a文とb文の違いが明らかである。つまり、a文の「男子の誕生」は、大廻家では曾祖父の代から120年後の二度目のことであるのに対し、b文の「ひなの誕生」は、24年前にこの飼育場が設置されて以来初回のことである。一見当たり前のことを言っているように思われるが、a文とb文の関係はすべて上のようなものばかりではない。次の例を見よう。

(35) a. 遭難者は18時間ぶりに救出された。(グループ・ジャマシイ1998)

b. 遭難者は18時間ぶりに初めて救出された。(作例)

(35)のa文とb文の根本的な違いは、「回数」というよりむしろ「人数(の多さ)」にある

と言えよう。つまり、a文の「遭難者」は単数（一人）とも複数（二人以上）とも解釈し得るが、b文のそれは後者のほうに解釈されるのが一般的であろう。現に(35)b'のような実例が見つかったのである。

(35) b'. …事故発生から約十五時間**ぶりに初めて生存者が救出され**、現場は歓声に包まれた。…。このあと二歳の女の子が助け出された。(北海道1988/7/9)

このように、形式上同じ対立関係にあるa文とb文であるが、両者の違いを考察する場合、「回数」だけでなく、「人数（の多さ）」に焦点を当てて考えることも必要であろう。が、準備不足で、これについて詳しく検討する余裕ができていないので、問題提示に止まることにする。

6. むすびと課題

以上、「(時間数詞) ぶりにV」という構文をめぐって、特に「初めて」との共起関係を中心にして、そして用例調査の結果に基づいて分析を試みた。本稿の要点をまとめると次のようになる。

①「(時間数詞) ぶりに」の表す意味を、「従来の基本的な意味」と「新たな派生的な意味」の二つに大別できる。そして、前者には「同一状態の反復」「初期状態への回復」の二つが含まれ、また後者は「状態の転換・生起」と言い換えられる。②「(時間数詞) ぶりにV」構文のVに現れる動詞は、「継続動詞」(または動作動詞)と「瞬間動詞」(または変化動詞)に限られる。③「(時間数詞) ぶりに完成」構文(c文)の成立条件として、「新たな派生的な意味」を表す「ぶりに」、「一回性」を表す瞬間動詞、「無」から「有」への状態生起、という三つの要素が揃うべきである。④「(時間数詞) ぶりに初めてV」という構文の例も大きく二つに分けられるが、その本質は、文章表現の簡潔性を求めるため、もともと二つの独立した文が一つに短縮された、ということにあると考えられる。⑤考察対象の使用実態・用例分布に大きな偏りが見られる。つまり、ここ20年来の新聞記事から多くの用例を集めたが、小説などの文学作品(CD-ROM版『新潮文庫の100冊』(日本人作家の作品のみ)や北京日本学研究中心『中日対訳コーパス』)においては一例も見当たらなかった。よって、これらのものは比較的新しい言い方だと言えよう。だから、この類の表現形式の妥当性・的確性に関して、著しい個人差が見られ、またこれに違和感を感じる人も少なくないのである。

これからの課題は、「(時間数詞) ぶりに初めてV」という構文に焦点をしばって、その内部構造や各成分間のつながりなどをめぐってもっと深く究明することである。なお、近年しばしば指摘される「ぶりに」の「好ましくない」用法(「3大会ぶりに金メダルを逃す」など)についても検討すべきであるが、これも今後の課題とする。

<注>

- (1) 「時間数詞+ぶりで」(「五年ぶりで会った」「二週間ぶりで退院した」など)や「時間数詞+ぶりの」(「四十年ぶりの再会」「五年ぶりの帰郷」「三日ぶりの晴天」など)についても考えるべきであるが、今回の考察対象から外す。
- (2) コンピューターによる検索なので、総件数の内、検索語と同じ構造を持っていながら、「情熱と仕事ぶりに初めて触れた」などのように、内容的に違うものや、同一記事内容の重複するものが、若干含まれている。
- (3) アンケート用紙では、表2に挙げた七つの例文のほか、それぞれの例文の下に、「～ぶりのN」という形の言い方を加え、これに対する回答をも求めたが、問題作成に不備があったことに後から気づき、よって、調査結果の整理の段階でこれらをカットした。
- (4) 金田一(1950)の4分類における「継続動詞」と「瞬間動詞」の二つは、奥田(1977)においては、それぞれ「主体の動作をあらわす動詞」「主体の変化をあらわす動詞」と呼ばれ、そして、「行く」のような動詞は後者に属するものとされるが、「キャラバンの一団が砂漠を行っている」に示されるように、「動きの最中」(『日本語基本動詞用法辞典』p42より)という意味に解釈されるので、むしろこれを前者、即ち「継続動詞」の用法と考えるべきであろう。

<主な参考文献>

- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15(金田一春彦編1976所収)
- 金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的阶段—」(『ことばの研究・序説』奥田靖雄、むぎ書房、1984所収)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 国広哲弥(1995)『日本語誤用・慣用小辞典<続>』講談社現代新書1250
- 定延利之(1997)「あの人は奥さんが三回変わりました」『月刊言語』1997-2
- グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための 日本語文型辞典』くろしお出版
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

付記

本稿は、2006年5月28日に中国北京・清華大学で行われた、日本言語文化国際フォーラム分科会での発表内容に加筆・修正を加えたものである。アンケート調査の段階から多くの方々にお世話になり、示唆に富むご教示を賜った。分科会の席上と発表後も、多くの方々から貴重なアドバイスと有益なコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。

(コ ギョウメイ 北京語言大学日本語学部教授)